

# 未来への伝承

## 文字を書いた器

うっわ

### ― 扇ノ台遺跡出土の墨書土器 ―

私たちが毎日のように目にする文字。そもそも、文字というものを私たちはいつ頃から使ってきたのでしょうか。文字との出会いは、古くは弥生時代にまでさかのぼります。中国の皇帝が、西暦57年に北九州の王に与えた「金印」のように、中国や朝鮮半島からもたらされた文物を通して私たちの祖先はじめて文字と出会いました。しかし、文字文化が社会に定着するのは、もっと後のことになります。7世紀後半に中央集権国家が成立し、国家の意思や命令が文書によって地方社会にも伝えられるようになってからのことです。

戸籍の作成や税の徴収など、古代の役所を中心にいけば支配の道具として文字が定着するにつれ、民衆の間でも次第に文字が使われるようになります。そのことを端的に示す資料が、奈良・平安時代の集落跡から出土する、墨書土器と呼ばれる資料です。土器に墨で文字を書いたもので、一文字のみ書くものが大半を占めます。集落で行なわれていた祭祀や儀礼に伴って書かれたもので、必ずしも文字を自由に使いこなしていたわけではないと理解されています。それでも祭祀や儀礼という場で、人間同士ばかりでなく神仏に対してもコミュニケーション・ツールとして文字を使用するようになることは大きな変革といえます。

墨書土器は、市内でも多く見つかっています。出土した墨書土器を眺めると、字体の崩れたものが目立つ一方で、上手な文字に出会うことがあります。

今回紹介する扇ノ台遺跡(土浦市中)より出土した墨書土器もその一つです。扇ノ台遺跡は、花室川右岸の台地上に位置する遺跡で、奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見つかっています。出土したものでは、写真左側の「中」のように練達した書き手を思わせるものが目を引きます。その端正な筆勢は、書き手が日常的に文字を書いている印象を与えます。

こうした練達した文字の存在は、何を物語っているのでしょうか。奈良時代の後半から平安時代にかけて、土浦も含めた霞ヶ浦沿岸地域では仏教信仰が急速に広まります。村々に作られたお堂を拠点に僧侶が活動し、火葬などの新たな文化も広まりました。經典をもとに法会を執り行い、写経を行なうことで功德を積む古代仏教は、文字文化を広める大きな原動力であったと考えられます。

扇ノ台遺跡でも、「卍」(写真右上)や「僧」と書いた墨書土器が出土していることが注目されます。直ちに佛寺の跡と断定できる建物跡は見つかっていませんが、この集落で仏教信仰が広まっていることを示唆しています。巧みな筆使いの墨書土器が僧侶自身によって書かれたものかどうかわかりませんが、仏教信仰を介して文字への理解が深められたことは間違いないようです。

今回紹介した資料は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で11月末まで展示しています。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)



墨書土器(扇ノ台遺跡出土)